

[研究ノート]

写真家アーカイブズの編成記述に向けて
—石元泰博フォトセンター所管資料の概要
朝倉芽生（高知県立美術館 学芸員）

[Research Note]

**Arrangement and Description of the “Photographer’s Archives”
Archival materials administered by the Ishimoto Yasuhiro Photo Center**

ASAKURA Mei

This text outlines problems and possibilities in the construction of comprehensive “Photographer’s Archives” that offer a complete and systematic overview of all documents and materials administered by the Photo Center. It gives an overview of the “Ishimoto Yasuhiro Collection” of works and documents that were donated to the museum by Ishimoto Yasuhiro (1921-2012), an internationally renowned photographer with roots in Kochi Prefecture, and his family, divided into the categories “Photographic Prints,” “Photographic Films,” “Photographing Apparatus”, “Books” and “Miscellaneous.” Next to describing the respective categories’ characteristics and how they are currently organized and communicated, the text summarizes relevant problems and future prospects. Also included are various materials related to Ishimoto that have been independently collected at the Photo Center during the ten years since its opening in 2013, and furthermore, the current state of the “Institutional Archives” of items that the Photo Center has created, obtained and preserved.

1 本稿は、「令和4年度アーカイブズ・カレッジ（資料管理学研究会）短期コース」の修了論文「写真家アーカイブズの編成記述—高知県立美術館石元泰博コレクションを事例に—」を元に加筆修正したものである。

2 石元泰博（いしもとやすひろ／1921-2012）。農業移民の子として米国サンフランシスコに生まれ、少年時代を両親の郷里である高知県高岡郡（現・土佐市）で過ごす。農業高校卒業後渡米し、日系人強制収容を経験。戦後、シカゴのインスティテュート・オブ・デザイン（通称ニュー・パウハウス）で先進的なモダンデザインの教育を受け、石元作品の根底を成す造形感覚を磨く。その後は東京を拠点に活躍し、戦後日本において、写真界のみならず、美術、デザイン、建築にわたる芸術界全般に大きなインパクトを与える。代表作〈桂離宮〉、〈シカゴ〉、〈東京〉シリーズほか多彩な仕事を手掛けた。

3 「アーカイブズ (archives)」という語の定義や用法は様々あるが、例えば、国際公文書館会議 (International Council on Archives) の Multilingual Archival Terminology においては「(1) 業務遂行の過程で個人又は組織により作成・収受されて蓄積され、並びにその持続的価値ゆえに保存された文書。(2) アーカイブズを保存し、閲覧利用できるようにする建物又は建物の一部。アーカイブズ保存所とも呼ばれる。(3) アーカイブズを選別、取得、保存、提供することに責任をもつ機関又はプログラム。アーカイブズ機関 (archival agency)、アーカイブズ制度、アーカイブズ事業とも言われる。」と定義されている。http://www.cisra.org/mat/mat/termlist/1/Japanese (2024年3月3日閲覧)



図1：当館2階の石元泰博展示室。旧講義室及びアトライブラリーを改修し、「作業保管室」「フィルム保管庫」と併せて整備され、2014年10月開室。「広める」活動の一環として、年間を通じて石元作品を常設展示している。

[研究ノート]

写真家アーカイブズの編成記述に向けて —石元泰博フォトセンター所管資料の概要¹

朝倉芽生（高知県立美術館 学芸員）

1. はじめに

「石元泰博フォトセンター」（以下、フォトセンター）は、高知県ゆかりの世界的写真家・石元泰博氏²とその遺族より高知県に寄贈された作品・資料および著作権を適切に保存管理し、継続的な調査研究を行い、国内外の多くの人々が利用できるアーカイブズとしてその価値を一層高めるため、石元没後の2013年、高知県立美術館学芸課内に設置された。以降、専従学芸員をおき、深める（保存管理／調査研究収集）、広める（展示公開／著作権管理）、つなぐ（教育普及）を軸とした幅広い活動を行っている（図1）。寄贈された「石元泰博コレクション」（以下、石元コレクション）の内訳は、石元による写真作品のオリジナルプリント（以下、写真プリント）約3万5千点のみならず、ネガ・ポジ写真フィルム約15万5千点のほか、図書、カメラ機材、美術工芸品、家具、書簡、愛用の家具等と多岐にわたる。このことから、石元コレクションは、単なる美術作品のコレクションではなく、写真家が生涯の公私にわたって作成または収受し蓄積してきた多様な記録によって構成された、アーカイブズ的な資料群ととらえることが出来る³。

これらの資料は生前から没後にかけて石元及び遺族より段階的に受け入れられ、主に「写真プリント」「写真フィルム」「撮影機材」「図書」「その他」という区分ごとに整理がなされてきた。本稿では、上記区分ごとに異なる資料群の特徴と編成記述の現状について、適宜課題や展望に触れつつ概観する。さらに、上述のような石元及び遺族を出所とする石元コレクションに加えて、設立より10年の年月の中でフォトセンターが独自に収集してきた石元関係資料と、フォトセンター自体が作成または収受、蓄積してきた「機関アーカイブズ」の現状についても触れる。これにより、フォトセンターが所管する資料群の全体像を体系的に示すとともに、包括的な「写真家アーカイブズ」構築に向けた課題と可能性を考えたい。

2. 石元泰博コレクション

先述の通り、石元コレクションとは、石元及び没後所有権が移譲された遺族を出所とするまとまりのある資料群(フォンド⁴)である。以下、区分ごとに詳述する。

(1)写真プリント

①特徴

石元コレクションの最大の特徴は、総数にして34,753点⁵にも上る石元自身による「オリジナルプリント」が含まれている点、そして、そのプリント全点が館所蔵の他の美術作品と同様に「作品」として取り扱われている点にある。これは、フィルム原板ではなく自らの手で制作した紙焼きのプリントこそが自身の作品であるという写真家の思想を反映してのものであり、石元の意思によって、手元に残されたプリントが基本的に選別などを経ず全点一括寄贈されたことによるもので、当館における作家一人あたりの収蔵作品数としては破格の規模を誇っている⁷。生前石元は、「ネガはあくまでもネガだし、やっぱりプリントしたものが写真だと思っているからね。オリジナルはこれしかないもんね⁶」と語っている通り、石元は、「美術品としての写真」を戦後アメリカから日本に持ち込み体現した人物のひとりでもある。こうした姿勢は、後述するフィルムに関する高知県との契約にも反映されている。ただし、本写真プリント群は、そうしたプリントのみならず、同一カットの焼き違いや、印刷原稿として制作されたプリント、試作と思われるプリントなども多数含まれており、大規模な美術作品のコレクションであると同時に、写真家の創作活動を包括的に記録した資料群とみなすこともできるだろう。なお、写真プリントは、主に版画作品を保管している美術作品用の収蔵庫にて保管している。(図2)

②分類と目録化

生前からの段階的な受け入れに伴って、シリーズや印画紙の種類ごとの仕分けや、裏面に記載されたフィルム番号によるソート、簡易的な複製、保存用包材への封入、暫定的なナンバリング等の作業が順次行われた。写真プリントを納めた保存箱の総数は受け入れ時の段階で約600箱にも上り、その後保存上のリハウジングや箱の分割を経て、現在は1,000箱超となっている。それぞれの箱の中身は、受け入れ時の原秩序を保ったものや、シリーズや被写体、出品展覧会によって仕分けされているものなど様々である。

2011年には、当時受け入れ済の〈桂離宮〉、〈伊勢神宮〉シリーズの写真プリント全点を対象とした展覧会図録兼館蔵品目録⁸を刊行している。これは、受け入れ時すでに4×5判フィルムがフィルム番号等により整然と組織されており、プリントとの突き合わせが比較的容易であったこと、それぞれのシリーズについて拠り所となる写真集が出版されていたことなどの好条件が重なったからこそ実現できたものである⁹。以降、その他のシリーズについては具体的な目録刊行には至っておらず、今後写真プリント全点を網羅的に把握し、目録化するには多大な時間を要することが予想される。

- 4 「フォンド」とは、「作成者の活動や機能の過程で、特定の個人、家、団体が活動するなかで、有機的に作成され、蓄積され、使用された記録の総体。様式や媒体を問わない。」の意。国際公文書館会議記述標準特別委員会「0. 一般原則に関する用語」『ISAD(G): 国際標準アーカイブズ記述 第2版』(日本語版)2000年 参照 [https://www.archives.go.jp/about/report/pdf/ISAD\(G\)2nd.pdf](https://www.archives.go.jp/about/report/pdf/ISAD(G)2nd.pdf) (2024年3月3日閲覧)
- 5 2013年6月時点。
- 6 松本徳彦『写真家のコンタクト探検』平凡社、1996年、p.93
- 7 例えば、石元と並び当館の「二大コレクション」と銘打っているマルク・シャガール作品の総所蔵数は、1,207点であり、石元の次に所蔵数が多い土方久功の作品数についても2,000点未満である。
- 8 『館蔵品目録10 石元泰博コレクション(1) 石元泰博の眼一桂、伊勢』高知県立美術館、2011年。
- 9 影山千夏「高知県立美術館の石元泰博コレクションについて」前掲書、pp.122-123。



図2: 当館3階の収蔵庫。写真プリントの多くが11×14インチサイズ(ブックマット装したものは16×20インチサイズ)の保存箱に収められている。

- 10 操作の簡易性や開発・維持にかかるコスト等を鑑みて、すでに当館所蔵作品の管理に導入していた早稲田システム開発株式会社の収蔵品管理システム「I.B.MUSEUM SaaS」を、石元の写真プリント専用で別立てし導入した。
- 11 「ファイル」とは、「同じ主題、活動、業務の遂行に関連するため、現用段階で作成者によって、又はアーカイブズによる編成のプロセスでひとまとまりに構成された文書単位。ファイルは、通常レコードシリーズ内の基本単位である。」参照は前掲註4に同じ。
- 12 「アイテム」とは、「知的に、それ以上は情報として分けることのできない最小単位。例えば手紙、メモ、報告書、写真、録音資料。」同上。
- 13 「シリーズ」とは、「ファイリングシステムに従って編成された文書。又は、同一の蓄積やファイリングのプロセスで生じたり、同一の活動から生じたりしたために1つの単位として管理される文書。特定の様式を持っていたり、記録が作成・受領・利用される際に生じたなんらかの関連により、シリーズはレコードシリーズとも呼ばれる。」同上。

③データベース

その一方で、複製した画像データのファイル名を、暫定的な分類記号や番号、裏書き等でリネームし、保存箱単位で作成したフォルダに格納することで、PCのファイルマネージャー（Windowsであればエクスプローラー）上で、簡単な検索や閲覧等が可能な簡易的なインベントリとして活用してきた。2019年度には、それらの画像データや別途管理していた保存箱のリストなど散在していたデータを統合して、クラウド型の収蔵品管理システムに移行し、より詳細なデータベース構築を進めている¹⁰。データベースにおいては、「保存箱（＝ファイルマネージャーでいうところのフォルダ）」と「プリント（＝同、ファイル）」の関係性を、アーカイブズ記述における「ファイル¹¹」と「アイテム¹²」に対応して捉え、それぞれテーブルを別立てし、「箱」と「プリント」それぞれのレコードを紐づけることで、物理的な階層構造やプリント単位では表現できない箱ごとのかたまりが有するコンテキストを記述している（図3）。例えば、展覧会出品のためあるプリントにマット装を施した場合、展覧会終了後、適正なサイズの別の保存箱へ移し替えられるが、その際データベース上では、「プリント」と「箱」との紐づけを解除し、移動先の「箱」に紐づけし直す、という操作を行う。これによって、現所在地としての新しい「箱」情報が示されるとともに、「プリント」のレコードには、出所を示す元の「箱」の情報が変わらず記載されたままとなる。なお、2023年度には写真プリント管理へのRFIDタグの導入を試行している。

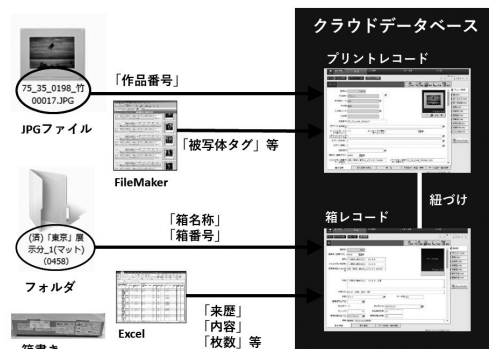


図3：データベースへの作品情報の統合

④シリーズ分類

すべてのプリントが作品シリーズや被写体などによって仕分けられ、それぞれ箱にまとめて収められている状態が理想的ではあるが、3万5千点近い膨大なプリントを限られた収蔵庫スペースに広げて仕分けるのは現実的に困難を極める。また、アーカイブズにおける原秩序保存の法則にしたがえば、拙速な「整理」は原秩序が有する情報の「破壊」にもなりかねない。そこで当面は、物理的には受け入れ段階の原秩序を保ちつつ（先述のような箱の移動を行った場合には、記録の原則に従い出所を記録し）、データベース上で大まかなシリーズごとに分類したり、被写体や年代などのタグを付したりすることによって、仮想的に「シリーズ¹³」分類を進めていきたいと考えている（表1・2参照）。

分類記号	作品の内容、シリーズ等	備考
A	雪のあしあと	
ak	空き缶	「秋田」と重複
AK	秋田	「空き缶」と重複
B	仏像	
Be	ビーチ	
C	かたち	
color	カラー多重露光	
D	泥とゴミ	
ex	2001年高知県美個展出品イメージ	出品プリントとは限らない
F	御陣乗太鼓（輪島）、ねぶた祭	
GT	大石寺	
h	HANA	「人のながれ」と重複
h	人のながれ	「HANA」と重複
Ha	落ち葉	
Ho	北海道（農業、議会）	
i	伊勢	「石元自身の影」と重複
l	石元自身の影 など	「伊勢」と重複
K	桂離宮	
Ka	かたち	
Ku	雲	
k-	シカゴこども、扉 ボード貼りLIFE応募作品	
m	水	
ma	曼荼羅	
NUDE	ヌード	
P	紙、ペーパーワーク	「ポートレート」と重複
P	ポートレート	「紙、ペーパーワーク」と重複
S	シブヤ、シブヤ	
Sa	日本の産業	
X	8×10	
Y	余市	
YI	初期アルバム	収容所～シカゴ
Z	他写真家	
刻	『刻』掲載イメージ	
竹	ギャラリーエークウッド個展出品プリント	
IL	印刷原稿（イルフォード）	主に花の印刷原稿等
G	印刷原稿（フェロタイプ、RCペーパー）	ヴィンテージの薄手バライタのフェロタイプ（～c.1970s）とRCペーパー（c.1980s～）
V	ヴィンテージ	
（記号なし）	シカゴ、日本（主に東京）全般	東京、広島 等

表1：受入時、暫定的に用いられた分類記号の一覧。膨大なプリント群は全体像が掴み難く、やむをえず重複がみられる。これと箱ごとに記述された情報を手掛かりに、表2のシリーズ分類を行った。作品番号は基本的に、裏書と分類記号、分類ごとの通し番号によって構成される。（例）83_35_Ha00393 → 落ち葉（刻シリーズ）の393番。裏面に「83 35」と記載有。この場合は、1983年プリント、35mmフィルムの意。

	シリーズ名	レコード数		シリーズ名	レコード数
001	日本	7,336	011	曼荼羅	59
002	建築	978	012	ポートレート	408
003	シカゴ	11,778	013	ヌード	161
004	かたち	830	014	シブヤ	1,149
005	刻(うつろい)	4,338	015	仏像	553
006	8×10	2,173	016	包まれた食物	38
007	桂離宮	1,730	017	サロン時代	0
008	伊勢神宮	761	018	その他	111
009	HANA	1,978	019	他写真家	182
010	多重露光	535			

表2：データベース上での写真プリントのシリーズ分類とそれぞれの点数（2024年2月時点）。シリーズ名（分類）は、整理作業にあたって便宜的に付したもので、写真集名やシリーズ作品名とは必ずしも一致しない。データクリーニングの途上であるため、正確なアイテム数ではない。

⑤作品タイトルと同一カット

目録編成を進めていく上で考慮を要する写真特有の問題として、作品タイトルの扱いと、同一カットの多さが挙げられる。写真プリント群の中には、同一の作品名が付された作品や、明確なタイトルが付されていない作品が散見される。これは、石元にとってタイトルというものの重要度が必ずしも高くはなかったと考えられることに加え、未発表のためタイトルを付される機会がなかった作品や、未調査によりタイトル未詳のままである作品が多いことなどに起因する。同一の作品名が付された作品としては例えば、1万点を超えるシカゴを写したプリント群の場合、便宜的な命名を含めると《シカゴ 街》《シカゴ こども》《シカゴ 雪と車》《シカゴ ハロウィン》《シカゴ ビーチ》のいずれかのタイトルが該当すると推測される作品が大半を占める。作品タイトルはその大まかなシリーズを示すのみで、個別の作品に対するタイトルはない、と言い換えることもできる。生前に付されたタイトルについては、基本的に被写体の名称をストレートに示すような傾向がみられる。

また、石元が撮影当時だけでなく、数十年ののちに再度プリントを制作したり、その際納得がいくまで何枚もトリミングや諧調の異なるプリントを制作したりしたことによって、同一カットに対して多数の焼き違いのプリントが存在する場合がある。こうした事情から、写真プリントの情報をテキストのみによって記述するには限界があり、目録編成においては、作品そのものを視認できる画像が重要な役割を果たす。

⑥印画紙の違い

先述したように、本写真プリント群には、様々な出自や制作経緯のものが含まれているが、収蔵にあたってはすべて等しく1点の「作品」としてカウントしている。近年では、70年代以降に作品として展示や鑑賞、市場流通することを想定し厚手バライタ紙で制作された、いわゆる「ファインプリント」のみならず、撮影当時にプリントされ経年により状態の芳しくないプリントや、印刷原稿として使用するために制作されたプリントが、却って「ヴィンテージプリント」として、あるいはファインプリントにはないイメージのプリントとして、その希少性や価値が高まる事例もみられる。作品や資料の価値は時代状況や評価の文脈などによって相対的に変化しえるものであり、プリントごとの差異を識別しながらも、優劣をつけて選別しなかった収蔵方針は、結果として、写真家の仕事を多義的・

多角的に評価することができる包括的なアーカイブズとして、その独自性を高めることに繋がっている。

(2)写真フィルム

①特徴

総点数が約 155,000 コマ (ポジフィルム 55,609 コマ、ネガフィルム約 100,000 コマ)¹⁴にも上る写真フィルムについては、上述のプリントと異なり、「資料」として位置づけて受け入れを行っている。保管については整理作業を行うことを想定し、温度 20℃、湿度 40 ± 5%と、美術作品用の収蔵庫よりやや低温低湿度に設定した、「フィルム保管庫」にて行っている (図 4)。石元は被写体や狙いによって多彩な撮影機材を使い分けていたため、残されたフィルムのフォーマットも、35 ミリをはじめ、6 × 6 や 6 × 9 などの中判フィルム、4 × 5 インチや 8 × 10 インチといった大判フィルムまで様々である。収蔵機関やエステートによっては、写真家の没後にフィルムから新たなプリントを制作する例も見られるが、本フィルム群においては、生前石元と高知県の間で交わされた契約において、没後のプリント作成が禁じられており¹⁵、フィルムをプリント作成のための原板として活用することが想定されていない点が特徴的である。

②利活用の用途

原板としての利用ができない以上、フィルムの利活用の用途としては、調査研究にあたっての参照が最たるものとなる。単純計算でもフィルムのコマ数がプリントの 4 倍を上回っており、プリントでは見ることができないイメージが多数含まれていることは確実である。スナップ写真においては、直接原板にあたって前後に写されたコマやフィルム包材への書き込み、フィルムのスペックなどを確認することで、最終的に採用されたイメージが、どのような時期や状況下で撮影され、選択されたものなのか、臨場感を持って辿ることが出来る。例えば、前掲註 6『写真家のコンタクト探検』では、写真集『シカゴ、シカゴ』(美術出版社、1969 年)掲載の少女を写したカットが詳しく分析されている。石元の場合は、現像後にコンタクトプリントを作成しておらず、一部を除き体系的なフィルム管理簿も付けていなかったため、そうした調査を進める上ではフィルム原板にあたる必要がある (図 5・6)。2019 年度には、箱や封筒のかたまりごとにフィルムの種類や枚数、表書き等をリスト化し、簡易的な検索手段としている。

また、プリント群においては、カラー作品が約 500 点程度 (全体の約 2%未満)と、モノクローム作品が圧倒的多数なのに対して、フィルムについては、カラーポジがおよそ 35%程度と相対的に多数を占めている。この中には、〈多重露光〉や〈両界曼荼羅〉、〈イスラム〉といった代表的なカラー作品のシリーズの他、雑誌の取材など外部からの依頼によって撮影されたものも多く含まれている。また、近年遺族より追贈されたフィルムの中には、代表作〈シカゴ、シカゴ〉シリーズ (1959-61 年撮影)と同時期に撮影され生前は発表の機会が稀であったと思われる、シカゴの街や人々を写したカラーポジが多数含まれており、「知られざる〈シカゴ、シカゴ〉」を垣間見ることができる。このように、フィルム群の詳しい調査を進めていくことで、より多面的な石元像を浮かびあがらせることが期待できる。

14 2013年6月時点。

15 石元とその妻・滋子が高知県と 2005年に締結した贈与契約書には「丙 (高知県) が (中略) 著作権の贈与を受けた以降も、丙 (高知県) は甲 (石元) の著作権者としての人格的利益を守り、かつ石元写真作品の芸術的価値、文化的評価を保持するため、石元写真作品又は写真ネガフィルムを利用して、オリジナルプリントと類似した複製品をつくってはならない」(丸括弧内註は筆者)と記されている。



図 4：フィルム保管庫。

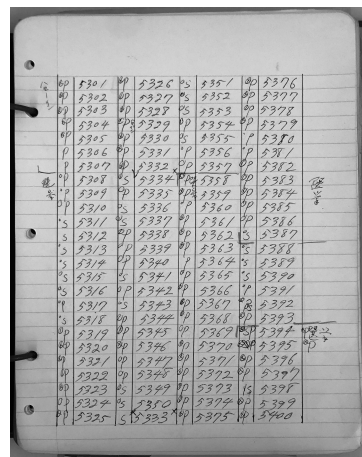


図 5：例外的に、後年作成されたと思われる 1959-61 年シカゴ撮影時のフィルム台帳。フィルム番号と共に「ハローイン」「選挙」などのメモ書きが見られ、アメリカ大統領選挙があった 1960 年の 10 ~ 11 月に撮影されたフィルムと推測できる。

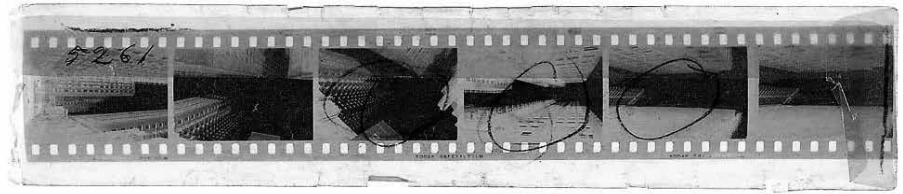


図6：写真集『シカゴ、シカゴ』所収イメージを含むネガフィルム。(オリジナルの半透明の包材に納めた状態で透過光によって撮影)

③課題

フィルム資料の課題としては、完成された「作品」の収蔵を主眼に置いた美術館において、「資料」はどうしても「作品」よりも下位に置かれ、整理作業の優先順位が下がってしまうという点が挙げられる。先述の通り、本フィルム群にはコンタクトシートがなく、体系的に管理番号や撮影年、被写体等が記録された管理簿も作成されていないため、その全体像を掴むことは困難を極めている。

フォトセンター設立当初、フィルムの整理や複製作業を学芸員が行うことを想定し、施設設備が整えられたが、作業の効率性や他業務との兼ね合いなどから、2015年度からはフィルムの複製、データベース化、包材入替を外部業者に委託している。先述のような本フィルム群の特徴や予算の都合により、その主な目的は、長期保存のための劣化した包材のリハウジングと、イメージを一覧できる、コンタクトシートと同等品としての画像データおよびデータベース作成の2点に絞っている。

約155,000コマもの数の整理・複製作業を完了するには予算上の課題も大きく、デジタル化の位置づけや、利活用の方針には検討の余地がある。特にカラーフィルムについては、経年による退色が著しいものも一部含まれており、コンタクトシートとしての簡易複製のみならず、長期的なイメージの保存や復元を目的とした高精細複製が必要であると考えられる¹⁶。また、様々なフォーマットを有し、ネガ/ポジ像を有する点、ロールごと、あるいはピースごと、コマごとといった、階層的な構造を持つ点など、フィルム資料の特徴に適した編成記述方法やデータベースの構造設計、写真プリントのデータベースとの連携などについても今後検討していく必要がある。

(3)撮影機材¹⁷

石元が生前使用していたカメラ等の撮影機材一式を収蔵しており、主だったものとしては、35mmカメラとして、ライカ(M3、M2、M4、M6)、キヤノンNew F1、中判カメラとして、ローライフレックスオートマツ、アルカスイス、ハッセルブラッド500C/M、大判カメラとして、リンホフテヒニカ(Ⅲ、Ⅳ)、ジナーS(図7)、ディアドルフ8×10など、ボディの総点数は21点である。その他、各種交換レンズや、三脚等の周辺機材を含めると、延べ150点以上となる。撮影機材はレンズなどの各種パーツを取り換えての使用が前提であり、どこまでの範囲を「1点」とカウントし記述するのか判断が難しいものも多い。各パーツの互換性なども考慮した、撮影機材に適した編成記述方法を検討していく必要がある。

カメラ類には合成樹脂や天然皮革など多様な天然・合成素材が複合的に用いられており、すでに一部には使用や経年による劣化や汚染が見られる。展覧会等で

16 石元コレクションにボーンデジタルの資料は含まれないが、アナログ資料からの媒体移行としてのフィルムのデジタルデータ作成を実施する場合などには、特にその長期保存や真正性の担保について十分な留意を要する。

17 2019年度に日本カメラ博物館学芸員 井口芳夫氏のご協力により、所蔵する撮影機材の悉皆調査を行った。本項目執筆にあたっては、同氏による調査報告(内部資料)を参照した。



図7：石元とジナーS(撮影者、撮影時期未詳。石元旧蔵アルバムより。)

の公開にあたっては、保存上の理由により、ケース内での静態展示を基本としている。

写真作品の制作において、作家の表現と機材との関係は切り離せず、撮影にどのような機材が用いられたのかは、作品・作家研究において重要な情報となりえる。撮影歴において使用されたことが分かっていたり、推定されていたりするものの、売買や譲渡などによって本コレクションに含まれていない撮影機材（カメラボディやレンズ、引き伸ばし機など）が存在するため、石元旧蔵品とは別途、参考資料として収集を進めることも検討している。

(4)図書

熱心な読書家としても知られた石元の旧蔵図書約 5,400 点を、没後に受け入れており、作家関連資料として、閉架のうち他の館蔵書よりセキュリティを強化したエリアで保管している。原資料の保存の観点から、蔵書シールの貼付や蔵書印の押印は現状行っていない。石元自身が貼り付けた付箋や、本を取り出しやすくするために一部をちぎり取ったケースなど、写真家が残した痕跡もそのままの状態で見守っている。日本十進分類法（NDC）など図書館で一般的な分類法は採用せず、プロジェクトとの関連性や自作掲載の有無などによる緩やかなまとまりに従って配架している。全点の目録化が完了しているが、個々の詳細な調査は未着手であり、今後は掲載文献調査や、写真家の思想をかたちづかった蔵書全体の傾向分析などを進めたい。また後述する通り、主な作品発表の場であった写真雑誌の多くや、主たる自著の写真集がコレクションに含まれていないため、これらの収集を随時進めている。

(5)その他

上記 (1) ～ (4) 以外の全てが含まれる、最も雑多な区分である。受け入れ前に遺族や関係者らによって選別されているため、住居にあったものが網羅的に収蔵されているわけではないが、資料の内容やメディアが幅広く、物量も多い。関係者によって整理されたものと、自宅に積まれた状態のまま持ち込まれたと思われるような書類の束などが混在し、段ボール箱数十箱分に相当する。書誌情報のように一様な目録化が難しいことから整理作業が進みづらく、アーカイブズの方法論を活用しての編成記述が最も待たれる資料群である（図 8）。



図 8：「その他」に含まれる資料類の一部。

2019 年度には、全ての段ボール箱を通覧の上、国際公文書館会議が定める国際標準アーカイブズ記述（ISAD(G)）¹⁸等を参照しつつ概要目録の作成を試みた。暫定的な資料番号として箱ごとに階層的なナンバリングを行ったことで、一部の資料については概要目録をたどって簡便に出納することが可能となった。最初からアイテム単位で全点記述し尽くすのではなく、まずはサブフォンド単位、あるいはファイル単位で概要を掴み、段階的に記述階層を深めていくという手順は、アイテム数の膨大な資料群を大まかに掴んでいくうえでは有効であったため、記述項目や作業フローなどを改善したうえで継続し、資料全体の編成記述を進めていきたい。

本資料群はあくまでも写真家の私宅に残された個人文書であり、組織として体系だって作成されたものではない。ファイル単位、プロジェクト単位での文脈を尊重し、原則として原秩序尊重の法則に則りつつも、適宜柔軟にシリーズを立て、

18 前掲註 4 「ISAD (G) :国際標準アーカイブズ記述第2 版」参照



図9：日野自動車株式会社の月刊広報誌『ヒノデ』表紙一覧。自動車部品や切り抜いた紙を構成したカットは、シカゴ時代に学んだ「ライト・モジュレーター」を彷彿とさせ、〈紙〉シリーズ展開への試行錯誤が窺える。



図10：石元泰博展示室における自宅リビングの再現コーナー。

編成していくことが必要なのではないかと考えている。

そうした編成を試行した一例を挙げたい。雑多な紙資料類のなかに石元が表紙写真を手掛けた日野自動車株式会社の月刊広報誌『HINODE』（日ので、ひので等とも記載）のスクラップが複数の段ボール箱にまたがって多数散在していた。そこで、ファイル単位の概要を記録後、スクラップをすべて抜き出し、年代順にソートして一つのコレクションとして編成し直した。半世紀近く続いた連載を順に並べることで、作風の変遷や同時期に制作されていた自作との関連性を一望することができる資料群とすることができた（図9）。このように、記録の原則に則り、アイテム同士の関わりやファイル単位の文脈を調査および記録したうえで、適宜再編成を施していくことで、より活用しやすい資料群の構築を進めることができるのではないかと考えている。

なお、高知県立美術館の石元泰博展示室には、東京都品川にあった自宅マンションのリビングを再現した展示コーナーを設置し、愛用していた家具類や調度品などを常設で紹介している（図10）。イームズチェアを始めとしたミッドセンチュリーのデザイン家具を配したモダンなリビングは、写真家の人柄やセンスを象徴する空間として、生前にはメディアにも度々登場している¹⁹。同展示室で通年開催している「石元泰博・コレクション展」では、この他にも、掲載書誌や使用された撮影機材などを中心に、展示作品と関連する多様な資料類を積極的に展示公開しており、見どころの一つとなっている。

3. 石元コレクション以外の資料

(1) 旧蔵資料以外の収集資料

上述してきたような石元及びその遺族を出所とする資料群以外に、フォトセンターが独自に収集してきた資料についても蓄積が進んでいる。生前および没後の廃棄などにより、重要な使用機材類や、掲載書誌等の資料が旧蔵品のなかに含まれていないケースも少なくなく、石元に関する資料の網羅的な収集を目指し、随時収集を行っている。

特に、戦後日本の写真家にとって写真実践の最前線であった写真雑誌をはじめ、美術館雑誌や建築雑誌などの雑誌類について、石元は自作が掲載された号であってもその多くを破棄、あるいは、書誌情報が採れない形で切り抜き、スクラップにしているため、完全体の原本の収集と目録化を急いでいる。

写真集についても、ヴァルター・グロピウス、丹下健三との共著として出版された代表作『桂—日本建築における伝統と創造』（造型社、1960年）が旧蔵図書の中に見当たらず、新たに購入し収集している。石元が参加した展覧会のチラシやポスターといったエフェメラ類についても同様に、網羅的に保存されているとはいえず、独自に美術館で収集した資料によって補完を進めている。

近年では、石元の生前に交流があった関係者や関係機関からの資料の寄贈申し出も増加している。そうした際の受け入れ態勢を整えると同時に、寄贈資料は出所原則に従い、石元旧蔵資料とは異なる「収集アーカイブズ（collecting archives）²⁰」として区別した上で、柔軟に活用していきたい。

19 例えば、大辻清司「大辻清司実験室⑩（この部屋の中で）」（『アサヒカメラ』1975年11月号）、新聞広告「サントリーリザーブ」（掲載紙・時期未詳、1970年代）、篠山紀信「人間関係 274 刻の夫婦」（『BRUTUS』2004年9月15日号）など多数。

20 「親組織以外の、個人、家族、組織からの資料を収集するリポジトリ」の意。“collecting archives,” Dictionary of Archives Terminology, Society of American Archivists参照。https://dictionary.archivists.org/entry/collecting-archives.html（2024年3月3日閲覧）

(2)機関アーカイブズ

開設より10年が経ち、フォトセンターが事業運営に際して作成または収受した資料も蓄積されてきている。具体的には、フォトセンター設立にあたっての検討委員会の記録、設備改修工事の記録、種々の事業における起案文書類、コレクション展の際に作成した印刷発行人物(図11)、著作権管理文書、講演等普及活動の記録、作品の複写画像データ等である。こうした「親組織によって作成または受理された記録を保管するリポジトリ²¹」である「機関アーカイブズ(institutional archives)」についても、館における業務随行において参照されるのはもちろんのこと、将来的には、写真家アーカイブズの事例として、より広く参照・活用されうるように構築してゆくことが求められているだろう²²。

4. フォトセンター所管資料の全体像 —写真家アーカイブズ構築に向けて

「石元泰博コレクション」との呼称は、冒頭に記した通り、石元および遺族を出所とする資料群(フォンド)の意として用いてきた。本稿では、石元コレクションのみならず、この語には含まれない、その他の収集アーカイブズや機関アーカイブズ的な資料群を含めた、フォトセンター所管資料群の概要について記述を試みた。資料群全体の編成を簡潔に示すと、下記の通りとなる。

石元泰博フォトセンター所管資料

1. 機関アーカイブズ

フォトセンターの業務執行上作成された資料
(委員会記録、回議書、印刷発行人物、著作権管理文書、講演記録等)

2. 収集アーカイブズ

寄贈、購入を問わずフォトセンターが収集した資料

2.1 石元泰博旧蔵資料(“石元泰博コレクション”)

石元氏及び遺族を出所とし寄贈を受けた作品および資料

2.1.1 作品(写真プリント)

2.1.2 資料

2.1.2.1 写真フィルム

2.1.2.2 撮影機材

2.1.2.3 図書

2.1.2.4 その他²³

2.2 IYPC 収集資料

IYPC が収集した関連文献、資料等

フォトセンターの業務執行上作成された資料を扱う「1. 機関アーカイブズ」と、フォトセンターが収集した資料を扱う「2. 収集アーカイブズ」とに二分され、従来から「石元泰博コレクション」と呼称している種々の資料群は、上図では、出所を石元および遺族とするフォンド「2.1 石元泰博旧蔵資料」として位置づけることができる。そして、収集アーカイブズには、2.1を補完する形で収集が進められる「2.2 IYPC 収集資料」が含まれる。

21 “institutional archives,” Dictionary of Archives Terminology, Society of American Archivists参照。筆者訳。https://dictionary.archivists.org/entry/institutional-archives.html (2023年3月3日閲覧)

22 2022年に開館した大阪中之島美術館には「アーカイブズ情報室」が設置され、収集アーカイブズとともに、「美術館が主体として作成したものの管理」を行う機関アーカイブズが設置されている。https://nakka-art.jp/collection/archive/ (2024年3月3日閲覧)



図11: 2014年から石元泰博・コレクション展のテーマごとに発行しているパンフレットは総数28種に上る。デジタル版はウェブサイトで公開している。https://iypc.moak.jp/?page_id=6047

23 「2.1.1 作品(写真プリント)」および「2.1.2.4 その他」には、石元旧蔵の他作家による作品も含まれている。棟方志功の肉筆画、魯山人の水差しといった美術工芸品の他、ハリー・キャラハンやマーヴィン・E・ニューマン、ネイサン・ラーナーといったシカゴの写真家たちの作品などが確認されている。これらの目録化も進め、館所蔵の他の美術作品と同様に展示等の活用を進めていきたい。

フォトセンター所管の資料群は、写真家活動の主たる成果物であるプリントとフィルムを核としつつ、石元泰博という人物の生涯を記録した多種多様な資料と、没後にそのアーカイブ構築に向けて行われてきたフォトセンターの活動記録によって構成されている。これらの資料群は、固定した写真家像を補強するためではなく、新たな価値や意味に対して開かれていくためにこそ、適切に保存、編成記述、公開されていくべきだろう。そのためには、国際的な記述標準やアーカイブズのメソッドに準拠した編成記述や、「ジャパンサーチ」等の分野横断型検索サイトとの連携なども視野に入れていく必要がある²⁹。さらには、館内外の石元関連資料に関するあらゆる情報を収集・蓄積するより包括的なリポジトリとして、あるいは関係するアーカイブズ同士を繋ぐハブとしての機能を果たすことができれば、なお望ましいだろう。こうした取り組みが実現できれば、より立体的な石元泰博像を浮き上がらせ、石元が残した仕事の歴史的・芸術的価値を担保するのみならず、未来の人間や芸術の在り方までをも照らし出す一助とすることができるのではないかと。

開かれていることと、繋いでいくこと。ひとりの写真家の包括的なアーカイブズだからこそ可能な活動を、今後も模索していきたい。

29 現状では、資料群全体の目録公開には至っていないが、全国美術館会議 情報・資料研究部会が実施した調査に情報提供し、『全国美術館会議会員館 アーカイブズ資料所在一覧2022』（全美アーカイブズ一覧2022）に資料概要が掲載されている。
https://www.zenbi.jp/data_list.php?g=93&d=20（2024年3月3日閲覧）